

## 地域主導型の公共交通支援の実現に向けた意見交換会 平川会場 主な質疑応答の要旨

日 時：平成24年12月22日(土) 16:00～18:24

場 所：平川公民館 2階視聴覚室

出席者：千葉まちづくりアーカイブズ協議会事務局 千葉工業大学 青木 梶原 泉口  
NPO法人ライフサポート波岡 近藤理事長 神山副理事長 高須理事  
袖ヶ浦市企画課長 公共交通担当職員3名

参加者：38名(男性29・女性9)

司会：只今、近藤理事長のお話を聞いて感じたことは、主体的に自立している活動であること、また、単に自立しているのではなくて、地域みんなで創りあげており、地域みんなに支えられている活動であるということ強く感じました。



参加者：10人乗りのバスで地域の方の面倒を見ているということであるが、例えばスーパーや病院など様々な場所へ出かけていると思うが、帰りの足はどうしているのか

神山副理事長：バスには時刻表があり、停車場所としてはアピタから清見台、ジャスコ、はぎわら病院、木更津駅東口、西口、市役所、スーパーせんだうを循環して団地に帰ってくる仕組みで、1日4便運行しています。よって帰りは停車場所から乗車して団地に帰ってきますが、1便9人しか乗れませんので、定員以上になった場合は路線バスなどを利用してもらうなど利用者自身で帰ってきてもらうことにしております。

近藤理事長：補足すると、我々の生活バスは路線バスと喧嘩をしないことを第一に考えており、朝は9時30分からであり、午後2時40分までしか運行していない。よって、路線バスのドル箱となっている、朝の通勤時間帯と夕方の帰宅時間帯は運行しないこととしている。また、路線バスの走る道路も極力走らないこととしており、バス停のお客を横取りすることはしておらず、路線バスとの共存を図っている。

利用者からは君津中央病院へ行きたいとのリクエストが多いが、団地からは君津中央病院への路線バスが運行されているので、我々は運行しないこととするなど様々な配慮をしている。

司会：このような先進的な取組みを実施する場合、やり方を一歩誤ると他者とバッティングしてしまい、競合相手になってしまう、むしろ、競合相手を仲間に入れてしまうこ

とで新たな展開と活動につながるということで、是非、今後、活動する場合の参考にしたい内容です。

参加者：循環バス「ガウラ号」と八幡台の「生活バス」についてデータを比べてみたが、運行区域はガウラ号の方が広く運行効率が悪いということが問題だと感じた。

そこで、この説明会を開催するにあたって、行政側の何か狙いがあるのか伺いたい。

企画課長：今まで行政としては、循環バス「ガウラ号」やデマンド型乗合タクシーなどを運行してきたが、非常に苦戦を強いられている状況にあり、行政のみで考えて税金を投入して何とかしようということには、正直、限界を感じている。このまま、これまでの取組みを市内全域に広めていくには物理的にも不可能である。そんな中、千葉工業大学が中心となって進めている「新しい公共」という、言ってみれば、昔はみんなの共通課題でなかったが、最近になってきて新しい共通課題になってきたもので、共通課題は行政が担うべきものであるが、そこに「新しい公共」という力を活用するものである。



まさに今回の交通空白地域とか交通弱者の問題というのは、以前はそんなに大きな問題ではなかったが、自動車が普及していない時代は地元の小売店で不便ではあったかもしれないが、それなりに用が足せていた。しかし各家庭、一人に自家用車1台という時代に突入したことで、生活圏が広がりバイパス沿いの大型店舗などに生活必需品を買い求める拠点が移ったことにより、自家用車を持っている家庭は便利になったが、車を持たない方は益々不便となってきた。また、以前であれば家族の中での支えがあったが、核家族化や高齢化により、そのような支えも期待できなくなっている。

このようなまさしく新しい共通課題に行政だけで取組んでも上手くいかない状況にあることから、我々、お隣、木更津市で地域が中心となって問題解決していく手段があるということで、我々行政をはじめ、地域の皆様方にもお声がけさせていただき、一緒になって勉強していきたく、今後について考えていければという思いで開催させていただきました。

司会：木更津市の立地特性、住民特性は袖ヶ浦市とだいぶ近いと思いますが、袖ヶ浦市との違いと言えば、木更津市では市からの支援がなかったことであると思うが、高齢化社会を迎える中での地域の変化についてはどうでしたか。

近藤理事長：我々も当初は木更津市長のところに支援をお願いしていたが、市からはお金は無いとの回答ばかりであった。団地からは曲がりなりにも木更津駅までの路線バス

は運行されていた。ところが、往復 880 円を要し、木更津駅に行っても店が無く、買い物するには例えば駅からアピタに行くために、更に別の路線に乗り継ぎ、合計 2,000 円近い運賃が必要となってしまう、正直、年金暮らしの高齢者には相当な負担となってしまうことから、生活バスを運行させるに至った。運行は 1 周 1 時間 20 分も要するが、高齢者は時間をいくらでも持っているという考えである。



よって、自分の用を足して、直ぐに家に帰りたいという方は、タクシーを使いなさいということになる。

司会：千葉工業大学の学生と一緒に地元の課題解決に向けて調査・検討させていただいており、袖ヶ浦市では交通問題で平川地区の区長さん等とお話をさせていただいていますが、外部の目線でみた感想を学生から話してもらいます。

千葉工業大学：習志野市や南房総市の活動にも携わっているが、市民の方々が自分達のまち自分達でという思いがまちづくりには大事であると感じた。特に袖ヶ浦市は市民に対する行政のバックアップが他市に比べて充実していると感じ、今回の交通問題の件についても、これだけ多くの方がお集まりいただいたので、今後、多くの方が声を出し、できることを行うことにより、住みやすいまちづくりができると思いました。

参加者：運行日から土日を除いているのは何故か。

近藤理事長：核家族化が進んでいるとはいえども、全く家族がない訳でもなく、家族が休みの日ぐらいいは身内の世話をしたいというのが本音である。しかしながら、そういった機会を持たない会員もいるので、別料金・別メニューにより運行させる場合もある。また、今年は木更津市から市民協働事業として 50 万円の支援を受けているが、会員の中からは君津市のジョイフル本田に行きたいという声が非常に多いが、我々、木更津市から支援を受けている以上、市外へ 1 円足りとも落としてはならないと思っており、市外への運行は行っていない。しかしながら、例えばお彼岸時期に生活バスのコースにない市営霊園に行きたいという要望があれば、対応することとしている。これが役所の仕事だとできない、我々民間だからこそ融通の利く、メリットであると言える。

司会：もともと農村地域の中では、地域間や親族間のつながりが色濃かった訳であるが、高齢化に伴いそういったつながりが弱体化してしまっていると思う。ここで企画課長か

ら袖ヶ浦市の高齢化率についてお話しただけですか。

企画課長：袖ヶ浦市の高齢化率は21%であり、先の国勢調査では全国平均が23%であったので、若干若い市であると言えます。ただ、若いと言っても地区別に見ると昭和地区、長浦地区は全国平均及び市平均より低いが、平岡地区、中川地区、富岡地区は全国平均を大きく上回っており、市内各地で差があります。

司会：私も南房総市の活動に携わっている中で、高齢化について驚かされたエピソードとして、南房総市の職員の方に聞いた話であるが、ある地域で若い夫婦が生活を始め、小さな子供をおばあちゃんに預けて面倒を見てもらっていた。するとある日、自分の子供が腰を曲げて歩くようになった。地域の高齢化率が40%を越える地域であり、周りが全て老人であることから、腰を曲げて歩いている人を見ているうちになってしまい、両親は慌てて保育園に預けたという話を聞いた。笑い話でもあるが、高齢化によりこのような深刻な事態も発生しているということです。

司会：会場の皆さんにお聞きします。皆さんの地域において高齢化で困っている状況等がありましたら、お話しただけですか。

参加者：私、百目木公園を管理しているのですが、おばあさんがお孫さんを連れて良く公園に遊びに来ております。3・4歳くらいの子供が腰に手を当てて歩いている光景を目にしており、

思わず、そのおばあさんに、「この子はおばあちゃん子ですね」と尋ねてしまいましたが、そのおばあさんは気が付きませんでした。これが当たり前になってしまっていることで、大変な事だと私自身も感じました。



参加者：利用者の大半は高齢者であり、乗車される場合は、自己責任「命預けます」で利用するとの話であったが、ドライバーも高齢者であり、安全という面では完璧ではないと思う。運転手の過失による事故も当然予想されるが、そのような場合、どのように対応するのか伺いたい。

近藤理事長：この8年間、無事故ではなく、数件の交通事故を起こしている。生活バスの運行における事故の示談については、NPOが全て責任を持って行っており、全て円満に解決しており、ドライバーの方には一切の責任は与えないとしている。

参考までに直近の事故をお話すると、駐車場所付近で、降車するおばあさんが、前の座席が空いていたため、走行中、シートベルトを外し、座席を移動しようとしたところ、車が急ブレーキをかけたため、車内で転倒し肋骨を骨折し、救急車で病院に搬送される

事故であった。NPO法人で契約している保険会社により治療費の支払いは行い、全ての示談の窓口をNPO法人として対応を行った。

また、利用者の意識という点でも、この事故によりケガをした利用者からは、自分のケガにより、風評が広がり生活バスの運行が無くなっては困るので、乗車中はシートベルトを外さないよう車内に掲示して欲しいと手紙をいただいております。事故をNPOの責任ばかりにするのではなく、利用者自身も乗ったら自分で自分の身を守らなければいけないとの意識が表れてきており、運行している側からすれば、こんなに嬉しいことは無く、我々は、少々のことでは済まないとこの思いにつながっている。

これが例えば、ケガをした家族の方がNPOに対し、慰謝料払えとか苦情ばかり言っていたら、ボランティアもやる気を無くすし、活動なんて続けていけない。

我々も事故に対して最善の努力をするが、避けられない事故もあり、その時には利用者の方も理解をしていただきたいし、ご家族の方もおばあちゃんが引きこもりにならないで、外へ出かけられる状況が作れていることを理解して欲しいと思って日頃の活動を行っております。

司会：これは利用者を制限しているのではなくて、NPOの日常の活動があるからクレームにならないのであって、単なる民間企業の運営であればクレームになってしまう。これが、地域の中で運営していくことではないかと思えます。

参加者：まちづくりという観点で市と大学が進めているとのことであるが、袖ヶ浦市で言えば袖ヶ浦駅海側の区画整理のような新しいまちで住み良いまちづくりなら解かるが、例えば、農村部などの既存の町で住み良いまちづくりが果たしてできるのか。住み良いまちづくりの交通をどうするかという点で、利用者が動くのではなく、医療や買い物などが在宅で利用できるような住み良いまちづくりを考えてもよいのではないか。

司会：これは新しく作るというよりも、今、皆さんが住んでいる既成市街地などで、地域にあるニーズや発生している課題を解決する計画をして欲しいということですね。まっさらな状態から考えるのは、まちづくりではなく、都市計画と言えばそうかもしれませんが、まちづくりというのは人がいるからこそその計画であり、今の状況を活かした、改善したというような、今、住んでいる人のニーズを活かした計画なのではないでしょうか。

本日のお話しを受けて、会場の皆さんが自分達もやってみようと思っていただければ、今日の講演会の成果があったと思うのですが、今後、市がこれらの活動に対する支援についてどのような考えであるのかお聞かせいただけますか。

企画課長：今、まさに交通手段を持たない方々について、どうしていくかということについて、地元からも色々なお知恵をいただいております。平川地区で現在、デマンド型乗合

タクシーの試験運行を行っておりますが、これを全市的に広げていくことは不可能であります。今の方法はライフサポート波岡の生活バスより便利ではありますが、財政的に維持ができない状況にあります。維持できないからと言って止めてしまえば、全てが無くなってしまいます。

維持できないから諦めるのではなくて、次の方法を見つけていかなければならない訳で、本日、お話を聞かせていただいた上で、地元の方が中心となって進めていただくことが、使い勝手など良いものができる、行政の画一的な考え方では上手くいかないと感じました。



ただし、そうは言っても、最初に地元で一から始めることは容易ではなく、市としても情報提供は行っていきたいと考えている。また、最初の一步を踏み出すときに大変であるのが、車輛を導入する場合などの初期投資であり、市はその初期投資に対してお手伝いできればと考えている。

参加者：ライフサポート波岡の生活バスの利用者は元気な方でなければ利用できないとのことであるが、利用者はどんなところへ出かけているのか。

近藤理事長：半分は買い物、半分が病院通いです。我々は介護資格を持っている訳でもなく、介護保険の対象でも無く、介護者ではない。よって、少なくとも自分の体は自分で移動できる範囲の方しか対応できない。もし、それ以上のことをして事故が起こったら車の保険だけでは対応できなくなり、善として行ったものが結果として、その方にご迷惑となってしまふ。我々の活動はやり籠から墓場までではなく、ある一定の範囲のお手伝いをしていることを投げ掛けている。

そこから先は、自助、共助、公助、色々あるが、それははっきりと言って行政の仕事だと思っている。ただし、行政にも限界があるので、今回、このような場を設けてもらうことは皆さんにとってチャンスであると思うし、是非、一步、前へ足を踏み出してみてもどうですか。

参加者：我々の地区では今後、買い物に困る人が増えてくると思う。先日、テレビで見たがスーパーが宅配してくれるという事例を見た。近年、子供が親と一緒に住むことが少なくなる中、こう言ったサービスを是非、市で検討していただけないか。



企画課長：現在、民間企業などで既に宅配サービスは行われておりますが、これに更に市の税金を投入すべきというお考えでしょうか。

参加者：そうです。現在、デマンドタクシーを運行してもらっておりますが、タクシーを降りてから歩くのが、出来ない状況の方が増えているからです。

近藤理事長：皆さんが御用聞きとして、活動すれば良いのです。例えば、生活バスは人を運ぶという概念が強いでしょうが、皆さんの中で、生活バスに乗る方が、買い物困難者の注文を受けて、買い物に行き、品物を注文宅に配達していくことをやることも一つの方法だと思います。しかしながら、我々が買い物代行を行わない理由として、認知症の方との金銭トラブルが発生しかねないためである。

司会：行政が行う事業の重要なキーワードとして公平性があり、どの地域でも実施しなければならないという、この地域で行ったら他の地域で行わなければならない、この地域だけでしか行うということができない、しかしながら、どの地域にも当てはまる仕組みというものは到底ある訳も無く、だからこそ地域から、こういうことをやりたい、という声を上げていただければ、それに対して行政は支援できる訳で、これを行政主導で行うと市全域で実施しなくてはならず、膨大な予算を必要としてしまう訳です。

よって、自分達の地域にはこういった課題がある、こういった仕組みが必要である、だからこういった活動をしてみたいという声を地域でまずは声を上げてもらうことが重要であり、市はそれに対するアドバイスを行ったり、資金的援助を考えていけるのではないのでしょうか。

現在、袖ヶ浦市では市民協働提案制度というものをスタートさせており、地域の皆さんの活動に対し、支援金が交付されるものであり、是非、このような制度を活用して、皆さんに声を上げてもらいたいと考えております。

最初は難しいと思いがちですが、地域で同じ思いを持った方で集まりお話いただくことからでも結構ですので、是非、この講演会がきっかけになればと思っております。

18時24分 閉会